

大衆教育社会と〈自己実現の物語〉

張江洋直・浜島幸司

●要約

本稿では、日常生活において存立している信憑性構造に関連づけて、わが国のポスト高度経済成長期における学校教育および教育システムの変容を論じている。ここでいうポスト高度経済成長期は荻谷剛彦が主唱した「大衆教育社会」を中心に、それ以降の時期に重ねられている。

この大衆教育社会の主要な特質とは、学校化社会における大衆的なメリトクラシーおよび大衆的な形式的平等という性向にみることができるが、その時期は概して1974年頃から1990年頃と考えてよい。とはいえ、この時期の後半期である1980年代において、新たな大衆的な性向、すなわち〈自己実現の物語〉が顕著となっている点には十分な留意が必要だろう。特に、1980年代に顕著となるこの性向にはある致命的な欠陥が存する点には止目すべきであろう。それは、この性向を判定する基準が必ず〈結果〉をもってしか可能ではない点である。いい換えれば、この性向を生きている途上においては、むしろ〈結果〉は目標として彼方に存するにすぎないのである。

周知のように、1990年代以降の長引く不況においては、誰もが、それぞれに抱くある程度の希望の範囲内で、こうした〈結果〉を獲得できるわけではない。それゆえ、大衆的に中心的となった〈自己実現の物語〉の性向は、〈結果〉を大衆的には獲得できないのであり、そこで生きる多くの若者たちは〈自己実現アノミー〉という世俗化的な状況を生きざるをえないのである。

●キーワード

信憑性構造

物語

ポスト高度経済成長期

学校化

メリトクラシー

平等志向

差別化

世俗化

はじめに

近年、教育への関心が過熱している。2005年にかぎっても数種の総合月刊誌が連動するかのように次々と《教育問題》を特集し、それぞれが熱い議論を交わしている(1)。このようにいうと、むしろ異論や反論のあることも承知している。というのも、教育への関心は近代社会以降においてつねに顕在的だといえるからである。現代に限定しても、教育は一貫した大衆的な関心事であっただろう。「教育の平等化」「新設高校の急増」「過度の受験競争」「校内暴力」「いじめ」「不登校」「学級崩壊」、またより近年の「学力低下」「フリーター」「ひきこもり」「ニート(Not in Employment, Education or Training)」などがすべて《教育問題》へと収斂する。このように一瞥しただけでも、それは明白であろう。

だが、1990年代後半から顕著とされる《教育問題》は現代社会の根幹に深く関わるとみられている。一方には当時「IT革命」と称された情報化のベクトルがあり(2)、他方には「フリーター」や「ニート」といった《職業生活への不適応》の大衆的な噴出がある(3)。前者は産業＝就業構造の変容問題とつながり、後者は就労意欲やコミュニケーション能力の寡少を含む《若者の変容》という問題系をあぶりだす。むしろ両者は連結され、そこに《学校教育の質的低下》《戦後教育の総決算》《長引く不況》《社会保障費》といった多用なモメントが加味される。では、現在のにはたして何が問われなければならないのだろうか。

こうした問題系に対して、すでに山田昌弘がひとつのかたちある応答を呈示している[山田昌, 2005](4)。彼の提言はシニカルではあるが明快なものだ。

現在、「勉強という努力が報われない」[*ibid.*:42] 時代が到来した。1990年代後半に「経済社会構造の大きな変化が起こった」。「それは、物を作って売るという工業が主要な産業であった時代から、情報やサービス、知識などを売ることが経済の主流になる時代への変化である」[*ibid.*:45]。つまり、《情報社会》が到来した(5)。この社会は「将来が約束された中核的、専門的労働者と熟練が不要な使い捨て単純労働者へ、職業を分化させる」[*ibid.*]。こうした2極分化した《新たな階層社会》において「インセンティブ・ディバイド(意欲格差)」[*ibid.*:43] が生じている。それはなぜか。時代の転換に対応して、戦後の教育システムに決定的な内的変容が生じたからである。ここで戦後の教育システムとは「自動的に職業に到達する」「分岐のあるパイプライン・システム」[*ibid.*:44] と捉えられる(6)。高校受験が第1の分岐点である。普通高校と専門高校との分岐がそのまま大学進学と就職とに対応し、第2の分岐点である大学・短大受験が学部・学科などによってそれぞれの就業コースに対応する。こうした戦後教育という「パイプライン・システムは、学習という努力が報われるシステムになっていた」[*ibid.*]。だが、2極分化がすすむ社会の到来に伴い、このパイプラインに「漏れ」つまり「パイプを流れても、そのままでは、職に就けない人が増大する」[*ibid.*:46]。その相貌はあたかも「教育の「バトル・ロワイヤル」」[*ibid.*:48] に匹敵する。「教育は、教育だけで成り立っているものではない。特に、今生じている教育問題は、教育と職業という領域の「継ぎ目」で生じている問題……であり、学校教育の改善だけでできる問題ではない」[*ibid.*:49]。

現況へのこうした山田の応答は大局的には首肯し得るものなのかもしれない。しかし、彼も適切に指示するように、戦後の学校教育システムが多くの人びとにとって「希望の象徴」[*ibid.*:43] であったとすれば、そこで大衆的に信憑されてきた〈希望の原理〉とは何であり、それはどのような経過をたどって弛緩あるいは変質し現在へと至ったのか。それらを把握するには、むしろ〈より微細なまなざ

し〉が必要であろう。さらにいえば、そこで山田が指定する人間モデルはあまりにも功利主義的に過ぎはしないだろうか。人はそれほど徹底して利害のみで自らの行ないを規制しはしないし、仮にそうした傾向性が大衆的に前景化することがあるとすれば、その結果だけではなく、むしろその経緯そのものが解明されるべき1つの問題系であるはずである(7)。また、そのためには、そこで生き・住まう人びとの信憑性構造という〈意味世界〉の吟味が不可欠であろう。

本稿では、こうした観点から1970年代半ばに成立する「大衆教育社会」とそれ以降において教育システムがどのようなものと大衆的にみなされてきたのかを捉えつつ、現在の的に大衆的に信憑される〈しあわせのかたち〉を「学校化」というベクトルにおいて考えてみたい。

1. 教育と近代——〈夢〉の原型

社会的な教育機能を専門とする社会機関が学校である。この命題を大前提として理路を出立してよいのだろうか。現代に生きる私たちの「常識」とは異なり、歴史的にみれば「学校……は近代において「発明」された」[佐野, 1997: 197]。たしかに教育という機能は、私たちが住まう社会的世界が新たな参入者である子どもを、それゆえ社会化過程をすでにつねに本質的な構成契機とする以上、いかなる社会・文化においても存立する。実際、「学校」を通時的に捉え、たとえば古代にその起源をみることもできる。しかし、教育機能と学校制度が等号で結ばれるのは近代社会以降においてである。

こうした歴史的経緯を「見知らぬ国の留学生」ゾマホンが平易かつ象徴的に語っている。

ベナンは、100年前までは、ベナン帝国として王の時代が続いていたよ。この時代のなごりが、まだ今もちゃんと残っているわけ。／それは、夜になると、村のお年寄りが村の子供たちに生活様式やいろいろな伝統や知恵を話してくれたの。そりゃ、楽しかったよ。青い月の光の中で私たちは、遠い祖先の話を聞くわけ。昔話とか、神話とかも。／[略]
ベナンでは、お年寄りが亡くなることは、図書館が一つなくなるようなものだと、昔からいわれているよ。[ゾマホン, 1999: 25]

かつての農本的な社会では〈長老〉が教育機能を体現していた。そこでは加齢と〈成熟化〉との対応に社会的に安定した相互性が成立し、それ自体には何の疑問も生じなかったにちがいない(8)。〈長老〉の知識は地域社会(locality)に生き生きと根ざす知恵であった。「神話」はアイデンティティを保証し、「昔話」はその名とは逆に将来に起きるであろう問題状況への対処を網羅的に示していたはずだ。そこには、近代がもたらした単線的な時間意識や均質な空間意識はない。だから、均一な国民性も存立し得ない。これらを可能とするのが近代化であり、「学校化」である。換言すれば、学校は社会編成に深く関わる決定的に重要な社会的装置である。それゆえ、過ぎ去った時間への郷愁とは裏腹に、ゾマホンの学校へのおもいは熱い。だが、すでに現代の日本人にとってこの感覚は希薄化し、かつ両義的である。

でも、私は逆に日本でいろいろ経験したことで、日本が先進国になってきた理由が教育にあることがわかってきた。私は今、日本の教育について調べている最中です。江戸時代の

寺子屋のこと、福沢諭吉のこと。調べれば調べるほど、国が発展するには教育が必要。／
そうしたなかで、私は、私の祖国、ベナンにも基礎教育を普及させなければならないと、
思うようになったのです。[ゾマホン, 1999 : 153-154]

ある時点から〈長老〉の存在が学校の教師、ときにはテキストへと置換され、彼らの情報が意味ある知識となり、目標となった。学校化——より広義には近代化の進展に伴い、〈長老〉という知の社会的な存立様態が遺物とされる。まったく別途に、学校や教師が〈知の司祭〉のステイタスを獲得する。とはいえ、たしかに現代の多くの日本人は教師にそうした期待を寄せはしない。だが、かつての私たちもまた、学校教育への熱いおもいを共有していた(9)。

日本では1970年代初頭まで人びとにとって《学校に行くこと》は〈夢〉であった。より上位の学校へと進学することが社会階層の上昇を結果する。その〈夢の扉〉が《学校に行くこと》によって保障される。このように大衆的に信憑されていた。「歴史的には、多くの民衆にとって学校教育は社会移動 (social mobility. それまでと異なる、通常はよりよい社会階層に属すること) のための通過点であった。むしろ、国民形成のために設立された学校は、よりよい就職の可能性と結びつくことによって民衆に受け入れられたとさえいえる」[山田雅, 2005]。

だが、大衆的に成立する夢とはそもそもパラドキシカルなものである。なぜならば、それが実現されたとしても、おもい描かれた差異性は決して現実のものとはならないのだから。1970年代半ばに実現する、わが国の大衆教育社会の成立もまた同種の展開を運命づけられていたといえる。こうした事情を把握するために、次に少し用語の確認をすすめながら、大衆教育社会の成立を主題的にみることにしよう。

2. 学校化と大衆教育社会——〈夢〉の変質

2-1. 学校化とメリトクラシー

「学校化 (schooling)」とはI. イリイチが多義的に用いたことばだが、ここではその中心を次の2点に収斂させてみることにしよう。①自らの価値判断に代える制度的な思考の大衆化 [Illich, 1970 = 1977 : 15]、②教えられることと学習することの混同 [ibid. : 32]。

ところで、そもそも「学校」とは何なのだろうか。ここではイリイチとともに「学校の代替」の方向性を模索したE. ライマーに従っておこう。彼はそれを保護監督、社会的役割の選択、インドクトリネーション、そして(通常は、技能と知識の発達を図ることと定義される)いわゆる教育の4点にみる [Reimer, 1971 = 1985 : 35]。学校が社会的役割の選択機能を果たすというのは充分に実感できることだし、保護監督という強いことばの響きを別にすれば、この指摘もある程度は納得ができるだろう。では、インドクトリネーション (indoctrination) とは何か。これは、「doctrine = 教義や偏った見解」などを「in = 入れる、吹き込む」という意味だから、「特定の思想や教義の吹き込み」[ibid.] ということになる。すると私たちは、いったい何を《学校で吹き込まれる》というのだろうか。

ライマーは《教えられることと学習することの混同》が子どもたちに吹き込まれると説く。「自分自身で学ぶことではなく」「何をいつ、どこで、どういう風に学ぶかは他人が決めることで、学習については他人に頼るのがよいことだと、子どもたちは教えられる」[ibid. : 47]。そのシステムがカリキュ

ラムである。つまり、学校とは「段階づけられたカリキュラムの学習のために、教師が監督する教室に特定の年齢群の者が常時出席することを要求する機関」[*ibid.* : 60] と定義される。いい換えれば、学校とは、たんに教育機能に限定されないだけでなく、むしろ保護監督しつつ多様な社会的地位に子どもたちをはめ込む選別機能を遂行する社会的装置といえる。それを正当化する最終的な方向が「メリトクラシー」[*ibid.* : 45] であり、これに妥当性を与えるのがインドクトリネーションされる《教えられることと学習することの混同》である。つまり、「大衆にとって、また大衆の指導者にとって、学校は社会的公正を実現する望みを、かつてなく高めてくれた。エリートにとっては、各人がふさわしい結果をえられるのだと万人に納得させる一方で、実は与えもしないものを与えてくれるように見せかける、比類のない道具だ」[*ibid.* : 43]。

さて、以上の論点を本稿の中心テーマに則して再確認しておこう。高度経済成長期に学校化が社会全般へと拡がり、1970年代には高校進学率が90%以上に達する。この事実は大衆的な〈夢〉の実現を意味するのだろうか。だが、そのほとんどが高校進学を果たす状態であれば、それだけで社会移動は現実化しない。それゆえ、大学進学が志向される。実際、この時期に受験競争の激化は著しい(10)。

このストーリーは適切だが、とても皮相的だ。それは《負け組》となった人びとの不満や悲しみ、憤りなどに何も触れていないかからだ。では、それらはどのように処理されたのか。その答えは明瞭なものである。多くの人びとは《不満を内に抱えつつ》、その後の人生をその人なりに営んだ。では、なぜ抱かれた《不満は内に秘められた》ままなのか。それは、人びとが諦念を抱えながらも自らが《勝ち組》になれないという事実になんて納得したからである。この《大衆的な納得》を社会的に成立させる装置がメリトクラシーである(11)。

そもそもメリトクラシー(meritocracy)は「メリット(merit)による政体(cracy)」といった意味合いの造語である[Young, 1958=1982] (12)。メリットが「価値、功績、手柄」などの意味だから、業績性(achievement)と同義と考えてよい。つまり、メリトクラシーとは近代社会の《社会構成原理》とみなされてきたものである。この点は、前近代社会の特徴である「帰属性(ascription)」と対照的に把握すると論点がより明瞭になるだろう。

身分社会にあって社会移動は例外的な出来事である。それに比して、近代社会はその可能性を保障する。家柄や階層、ジェンダーなどの属性ではなく、その人のメリット＝能力・努力・業績によって、その人の評価が、それゆえ社会的地位が決まる。このようにメリトクラシーは大衆に語りかける。だが、それらはどのようにしたら「公正な」判定が可能なのだろうか。そのためには、学校という均質的な社会的装置が必須なのである。

学校教育という場面で实际的に基準となるメリットとは〈学業成績〉である。学校間格差をも含めた〈学業成績〉が社会的地位選択の指標となる。これが高度経済成長期においてひろく成立する。人びとにメリトクラシーが信憑されるかぎり、この指標化は少なくとも何がしかの妥当性を保持し続けるはずである。こうしてメリトクラシーのもとで彼らは、どのように不満を感じようともそれを内に秘めて《納得してみせる》他にないのだ。どんな時でも《悪いのは業績結果を示し得ない私だ》というわけなのだから。

こうして教育という近代の〈夢〉は高度経済成長期を通じて「メリトクラシーの大衆化」[荻谷, 1995 : 15] をもって、多くの人びとの《納得してみせる相貌》を伴いつつ新たな段階へと入った。1970年

代中葉に「大衆教育社会」が成立する [ibid. : 199]。

2-2. 大衆教育社会の成立以降——「人なみ化」の変質

1974年に高校進学率は90%を越えている。だが、たんなる教育の量的な拡大が大衆教育社会成立の指標ではない。荻谷剛彦はその特徴を次の5点にみている。「大衆の教育への動員、メリトクラシーの大衆化、形式的平等の追及、明確な文化的アイデンティティをもたない学歴エリートの創出、そして、教育における〈不平等〉を不問に付す平等信仰」[ibid.]。これら5点は相互関連的だが、ここでは〈平等性〉に焦点化して議論をすすめよう。この性向も戦後社会の重要な信憑性の指標といえるが、少し時代を遡りつつそれをみることにしよう。そのために、まずは作家・評論家である大塚英志のこ

ぼくは中学しか出ていない父親と母親の息子だが、彼らは戦後の日本社会の原則であった機会均等主義を信じてささやかなその労働の対価をぼくらの教育費に費やし、ぼくは大学に進学した。[中略] ぼくがこの国の戦後モデルはそう間違っていない、とずっと主張しつづけるのは、「中流幻想」的な機会均等主義が父や母の世代の日本人の生きる希望であったことを知っているし、ぼくはその恩恵として大学の教育を含め、こうやって物を書く技術や足場を手に入れることができたと考えるからだ。

〔「中央公論」編集部，2001：215〕

1958年生まれの大塚は高度経済成長と共に育ち、ちょうど大衆教育社会の生誕時近辺を高校生・大学生として過ごしたことになる。ここで指摘される「戦後モデル」とは、「戦後社会の平等主義は誰もが「中流」になれる機会均等主義からなる自由競争の原理」[ibid. : 216] を意味する。大塚の指摘の秀逸さは、「誰もが「中流」になれる」とする《中流幻想》と共に、戦後の「平等信仰」を「機会均等主義」へと明確に平坦化させて、そこに大衆化するメリトクラシーの原型を《自由競争の原理》として捉える点にある。

しかし他方で、既述したようにイリイチやライマーはメリトクラシーを現状維持的なイデオロギーとみる。なぜならば、経済階層や文化階層とメリトクラシーの指標とされる〈学業成績〉とには実際に明確な正の相関関係が成立するからである。いい換えれば、メリトクラシーの指標は中産層以上の子弟に有利にはたらく。つまり、現状はすでにつねに不平等であり、「学校は社会を再生産する」

[Illich et al., 1973 = 1979 : 9]。

はたして両者のどちらが妥当なのだろうか。じつは、両者は共に事態の反面のみを正確に捉えている。概していえば、そもそもどのようなものであれ《自由競争の理念》はそれが現況を照らす光源として作動するのでないかぎり、すぐれて《現状維持的なイデオロギー》として機能する。というのも、競争の前提をなす〈現状〉とはすでにつねに不平等でしかないからである。しかも留意すべきは、自らの現況を《不平等》とする感受そのものが、一方で諦念をもたらす場合があるにせよ、この《競争》への参入を促している。ましてメリトクラシーが大衆化する状況にあっては《競争への参入者》は増加する他にない。そこには《社会移動のチャンスがある》。この大衆的な信憑が〈夢〉として紡ぎだ

される。

子どもたちに与えられるチャンスが均等であること、これが戦後の〈平等神話〉の要点であり、人びとの性向は直線的なエリート志向ではなく、より弾力性のある《中流》へと向かう。これが大衆化されたメリトクラシーの実質である。じつは、ここでいう《中流》ほどその内実が不明瞭な概念もそうはないのだが、ここではそれを上野千鶴子がいう「人なみ化」〔上野, 1982: 107〕の意味と重ねて理解しておきたい。つまり、この「大衆社会の欲望の構造」〔*ibid.*〕が高校進学率90%以上を大衆的に実現していったのである。それは《誰にもあがなうことのできない社会的公正》として信憑されていた。

だが、この〈夢〉が実際に大衆的な単位で達成される時、「平等化が激しい競争をもたらし、教育の質の画一化をもたらしていく」〔稲垣, 1984: 46〕。こうしたパラドキシカルな事態を生きる人びとのなかから、新たな大衆的な性向が生起しはじめる。

私は高度成長期以降の人々の欲求性向を、「人なみ化」から「差別化」へと定式化したが、両者の関係は二段階のものと言うより、表裏一体に進行すると言ってよい。／人々は「人とちがう」ことをのぞみながら、同時に「ちがいがわかる」限りで「人と同じ」であることを望んでいる。〔上野, 1982: 107〕

上野がいう「人なみ化」の二層的契機は重要な指摘である。だが、「差別化」に関わる吟味は次章に譲り、それ以前に捉えておくべきことがある。それは「人なみ化」の内実の変質である。留意すべきだが、「人なみ化」は高度経済成長期に限定された大衆的な心性ではない。それはポスト高度経済成長期である大衆教育社会の成立に伴い実相を変え、私たちの前に現れている。

高校進学が大衆化した時点で、もはやそれは社会移動の手段の意義を希薄化させる。「高校進学さえすれば」という「人なみ化」のベクトルは、それが大衆的に達成されることで〈夢〉を日常の出来事へと変える。だが、この性向はそこに留まりはしない。それは高校に進学していない状態を〈普通でないこと〉へとカテゴリー化し、高校進学をしない一部の中学卒業者や高校中退者・不登校生徒たちを、その事実だけをもって〈普通でない〉という視線にさらす。このときメリトクラシーは道徳的権威という相貌をもって、このまなざしにおいて生きいきとはたらいっている点には充分な留意が必要だろう。だが、同時に、このまなざしは別途の事態をも結果する。

1970年代後半から1980年代中葉にかけて、「校内暴力」や生徒の逸脱行動が社会問題化した。この事態をメリトクラシーからの《逃走》と捉えてみよう。逸脱行動を起こした少年が就学していなければ、その諸行為はたんに刑事罰の対象となる。だが、就学中の少年は学校から注意・停学・退学などの刑事罰とは異なる処罰を受けるはずである。つまり、少年が生徒であるかぎりその責任は拡散され、彼の将来的な可能性の前でメリトクラシーによる《教育的機会》が与えられる。こうして、少年たちの《逃走劇》は退学へと至らないかぎり学校化のベクトルに絡めとられる。

では、退学とは何か。それは、一見すると「人なみ化」の圧力の終焉とみえるかもしれない。だが、それが達成されたとき、それは同時に彼が〈みんな〉ではなくなったことを告げる。つまり、彼は〈普通でない〉とカテゴリー化され、そのレッテルを内面化しないかぎりその《事実》によって、その後も否応なく「人なみ化」の重圧をより強く意識し続けなければならないだろう⁽¹³⁾。

ところで、ここでいう「将来的な可能性」とは何なのだろうか。むろんそれは、就学者が持つと予測される《未だ実現されていない目的達成に関する蓋然性》のことだろう。では、それがなぜ《教育的配慮》や《教育的機会》といった用語群と意味論的に連携するものとして使用されるのだろうか。それは、教育というシステムが本質的にはらむ時間構造と必然的に関連するからである。

ここでいう〈教育の本質的な時間構造〉とは、それが必ず〈目的に向けて現在を手段化すること〉を意味する。この性質はたんに逸脱の問題系で生じるものではなく、むしろひろく教育全般に妥当する。「現在は未来に備える時間としてのみ意味をもつ」[上野, 2002: 168]。この時間構造を支えるのが進歩史観である(14)。上野はそれらを総称して「無邪気な神話」[*ibid.*]と呼んでいるが、高度経済成長期がメリトクラシーの大衆化を現実化していった背景には、《右肩上がりの経済成長》と表象される〈世俗的な進歩史観〉という——科学主義への全幅の信頼も含んだ「無邪気な神話」への大衆的な信憑があるだろう。いずれにせよ、教育システムは〈現在の手段化〉を本質的な契機とする論点は後論との関係からも充分に留意しておかなければならないだろう。

3. 差別化とトラッキング・システム——新たな〈夢〉の台頭

3-1. 匿名化する関係性と〈自己実現の物語〉

大衆教育社会成立以降において明確になる差別化の方位は2つである。一方はそれまでの既定路線を邁進し強化・先鋭化する方向であり、他方は学校化の新たなフロンティアを拓くものである。この2方向は、すでに高校受験時においては始まっている。

前者は「普通科」に象徴化され、いわば《普農工商》という序列を結果する。この「普通高校進学への傾斜」は、その内部にさらに「普通高校内部の格差顕著の傾斜」を胚胎させている。つまり、超エリート校を筆頭とした位階的一元的な普通高校の序列化である。ここには私立中学・中高一貫校への過剰な傾斜も含まれる。

他方、後者は「専門学校の台頭」に象徴化され、現代の「資格重視」の風潮へと連なっている。この性向は「学歴偏重」への対抗的意味合いを濃厚にするようにみえる。というのも、「資格重視」へと連なるベクトルは《学歴と実力(メリット)との乖離》を問題視しているからである。しかし、じつはこれらは共にメリトクラシーを基礎にしてしか成立し得ない以上、両者は表裏一体の関係にある。いずれにせよ、この性向は《教えられることと学習することの混同》が成す自己運動といってもよく、学校化は次々に〈未開の地〉を拓いていく。

こうした事態は、たとえば社会福祉系に代表される《新たな社会的ニーズに対応した新学科群》を指すだけではない。このベクトルは、たとえば調理・理容・美容・服飾といった従来の《職人的伝承の領域》に留まらず、それまでは教育の傘下とはみなされてこなかったアニメーションや声優、マンガ、ポップ・ミュージック、芸能などへと拡がっている。この傾向性は近年の大学にも同様にみることができよう。

ところで、社会移動を保障してくれる〈夢の扉〉である進学が大衆的に達成されるに伴い現出したのは、たんに大きな2つの岐路という〈制度的なりアリティ〉だけなのだろうか。この2つの方位の結果を知る現在の私たちからすれば、それを「大衆社会から新たな階層社会へ」[荻谷, 1995: 207]の移行として描写することができる(15)。その延長線には、「不平等社会日本」[佐藤, 2002]や「希望格差社

会」[山田昌, 2004] といった現況の社会理解がある。これらの指摘は概して妥当なものだろう。しかし1980年代以降という大衆教育社会の只中において顕在化していったのは、「新たな階層社会」へと向かう大衆的な志向ではなく、むしろメリトクラシーそのものにすでにつねに影のように付随する〈自己実現の物語〉の自立化の性向であった。つまり、前者は后者の《予期せぬ結果》なのだ。

この性向は「〈私〉探し」[上野, 1991] やさらにより一般的に〈自分探し〉へと置換可能な大衆的なものであり、それを差別化の具体層ということもできるだろう。いずれにせよ、1980年代以降に〈自己実現の物語〉が新たな〈しあわせのかたち〉として大衆的準位で作動しはじめ、1990年代には前景化される。

さて、この問題系を把握するためには、専門学校系にひろくみられる視線の吟味がまずは有益であろう。というのも、そこには学校を《必要な知識を効率よく摂取するためのもの》とする《メリット＝実力主義》のまなざしや態度の形成が顕著だからである。むろん、そこにある功利性を正当化し得るのが〈自己実現の物語〉である。その典型例として、1982年に開校した「吉本芸能学院 (NSC)」をとりあげよう。その第一期生に松本人志がいる。

最近でこそ、珍しいことではないが、われわれのデビュー当時（十数年前）は、弟子入りして二、三年の修行を積んでデビューするというのが、普通であった。[中略] では、なぜ弟子入りしなかったか？（それを書くには、かなりの根性があるが）どう考えても、師匠の舞台が終わるのをおしぼりや水を持って待っていることが、芸に関係あるとは思えないのである。[松本, 1994: 18-19]

松本は《師匠への弟子入り→付き人（修行）→デビュー》という従来の芸人養成パターンを、遺制的な非合理性と一蹴する。彼にとって妥当な選択とは、むろん《学習は学校でのみ可能》とする大衆化された制度的な思考を生きることである。留意すべきは、松本がスキルの習得を目標としている以上、「体験学習」や「実習 (on the job training)」そのものに異を唱えているのではない点である。彼の疑問は《付き人》と《実力養成》との関係に焦点化されている。いい換えれば、松本の志向は功利的な〈知のハビトゥス〉を形成し、《メリットの涵養》が目指されている。その志向は〈生きられた学校化〉と呼ぶに相応しい。

この学校化された制度的思考に重ねられる功利的なまなざしは、むろん松本だけのものではない。1989年に実施された「専修学校在学者意識調査」の結果を『専修学校全論』[関口, 1990] から一瞥しておこう。調査は、大阪府と京都府所在の専門学校11校、学生数1765人に対して「自由記述法」で実施されている。

大きな会社ではなくていいから、今勉強していることをそのまま活用できて、思いっきり仕事をさせてくれるところに就職したい。[コンピュータ系] / 学校の授業の内容は家庭でも職業でも結びつき役立つと思う。一生懸命勉学に励んだら、それだけで自分の将来の夢に近づくと思う。[栄養系] / 専門学校へ来て本当に学歴社会ってくだらないと思う。数学や国語なんかを勉強するよりも、実践的な専門知識の方がいい。[工業系] / 現在の専門学校

のカリキュラムが一番充実していると思う。〔コンピュータ系〕／学校では課題などが多くて楽しいし知識や技術をたくわえられることはとても有意義である。〔服飾系〕／課題がもう少し少なければ良い学校と思う。〔服飾系〕／学校は金をもらって営業している以上、もっとプロ意識をもち、真のプロフェッショナルを育成してもらいたい。実際には育っていないのを生徒のせいにするなんてよくない。栄養士という人材を養成するのが学校の仕事だと思う。〔栄養系〕／学生生活はこれで最後なので、いつでもたくさんの資格が取れるようにがんばりたいと思う。〔会計系〕〔関口、1990：448-468〕

彼らの進学目的は、専門学校にしかないとみなされる〈標準化された知識・スキル〉の習得にある。彼らが求める「資格」はその具象化であり、それらは《仕事に役立つ知識》と信憑される。彼らのなかには、やむなく専門学校へ進学した者もいたはずである。だが、彼らは〈自分自身を実現する〉ために〈専門性〉の獲得にいそしむ。彼らが学校に求めるのは、こうした《必要な知識を効率よく教えてくれること》である。なぜならば、現在習得中の〈知識やスキル〉が《役立つ》のでなければ、〈手段化された現在〉が持つはずの意義そのものが霧散化せざるを得ないからである。それゆえ、彼らが示す過剰なまでの制度的な言辞は、そのステレオタイプ化された形態とは逆に、すぐれて実存的である。いい換えれば、彼らのまなざしが示す功利性はそのアイデンティティと深部で連動している。

この功利的なまなざしの前で、かつての技能伝承システムは拒絶され、より効率のよいとみなされる学校＝カリキュラム・システムが徒弟制を凌駕する。そこでは師匠は講師へ、弟子は受講生＝学生へと変わる。だが、この置換とは、たんなる名称変更以上のものである。

というのも、それらは自らの存在論的意味の変質に他ならないからである。つまり、そこでの人間関係はより類型化され、より匿名的になる。いい換えれば、そこでの人間関係はより《希薄化》される。むろんその分、状況内のリスクは軽減されることになる。だが、留意しなければならない。なぜならば、「訓練を受ける者が感情的に関わり、失敗を後悔したり、うまくいった仕事に対して喜びを感じたりするのでなければ、彼もしくは彼女がさらに成長することはない」〔Dreyfus, 2001=2002：52〕からである。つまり、状況内のリスクをより積極的に引き受ける志向なくしては、より上位の学習は達成され得ないのである。だが、それを保証するのは、本質的にいえばカリキュラムの優劣でも、学校へと注がれる学生たちが示すアイデンティティに深く関わる《熱くかつ功利的な視線》自体でもない。それを担保するのは、むろん諸個人が示す〈自己実現の物語〉をより具体化できる、その《強度》による他はない。いい換えれば、学校化された大衆的な志向において成立する〈自己実現の物語〉はそのはじめから蹉跌という結果を運命づけられている。

3-2. トラッキング・システムと〈自己実現の物語〉

概していえば、メリトクラシーの大衆化をもって〈社会的な選別機能を担う学校という社会的装置〉は完成したといえよう。だが、1980年代を前後する一連の「校内暴力」の季節が終息して以降、2つに大きく分かれた人生の岐路の前で佇む15歳や18歳の少年たちは、あまりにも《従順にみえる》。彼らの《従順な》態度性は、この〈社会的装置の完成〉と関連するのだろうか。たしかに、そこに肥大化した「人なみ化」の重圧をみることはできるし、それは適切な指摘だろう。だが、はたしてそれだ

けなのだろうか。この謎を解く鍵を、ある大学予備校の講師が語っている。

初期のころ、受験生たちは模擬試験受験後に手渡される個人成績表に表示された合格可能性をみて「俺が受けるんだ。余計なお世話だ」と反発さえした。あるいは合格可能性評価が出されるプロセスをしつこく聞いてきて、「ああそういうことか。A評価で統計的には合格圏にいるけれど、油断するなということだな」「D判定だけど、これから頑張れば手の届く可能性はあるんだ」などと、自分でデータの意味を消化して学習の励みとしたものである。／しかし昨今では、この目途としての情報の受け止め方が、ずいぶん当初の意図するところから外れてしまっている。情報というものはある程度時を経て信頼が積み重なってくると、ひとり歩きをはじめるのである。一回の模試でA判定が出ただけで、お祝いの晩餐会ですし屋に連れて行ってもらったり、入試にはまだ時間がたっぷりある一学期の模試で、E評価が出たからといって、直ちに志望大学を変更してしまうなど、困った状況も起きているのだ。[丹羽, 2004: 51-52]

偏差値の意味受領のズレを嘆く丹羽健夫は、少年たちの《従順さ》の根拠を知識や情報への物神化にみる。この指摘はある意味では妥当なものだろう。というのも、元来、偏差値という数値自体はたんに統計学的な意味をもつに過ぎないからである。つまり、模試の成績表に示される「A判定」や「B判定」などは、この数値に受験上の可否の蓋然性を指示するレッテルを重ねただけのことであろう。それゆえ、それをあたかも《啓示》の如くに受容する少年たちの態度は物神崇拜的である(16)。

だが、むろんそれだけではない。なぜならば、彼らの態度には明白な〈合理的な根拠〉が存立するからである。では、その〈合理性〉とは何か。それはとても単純なものである。彼らは統計学を知らないし、知りたいともおもっていない。つまり、《理解し得ないが必要なもの》は括弧に括られる。これが、そのすべてである。

少し敷衍しておこう。概していえば、この態度性は私たちと〈道具〉との関係にひろくみることができる。たとえばコンピュータの使用に際し、人はたとえその工学的なメカニズムを何ら知らなくとも、それを道具として使用することができる。そこで知っておかなければならないのは、その工学的な知識ではなく、むしろその使用法とトラブルへの対処法である(17)。これとまったく同等の事態が、人生の岐路に佇む少年たちに生起している。

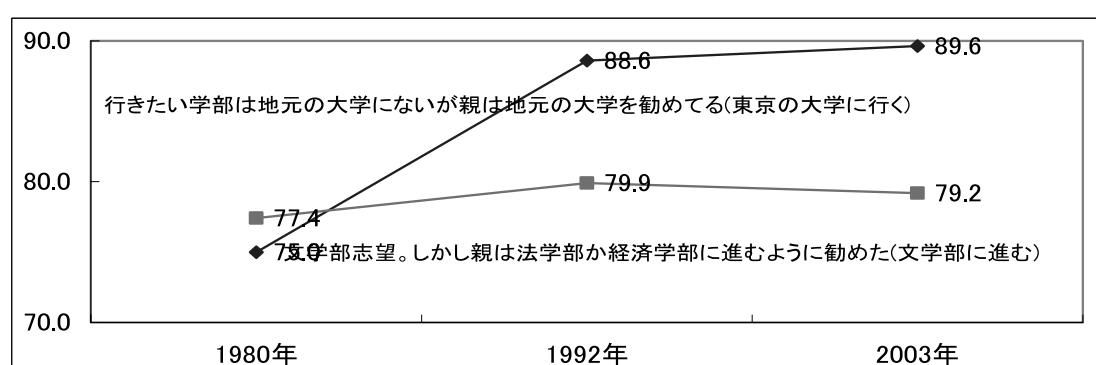
彼らにとって偏差値に代表される受験システムはたんに道具であるに過ぎない。それゆえ、道具のメカニズム自体は問題ではない。この点で彼らはすこぶる〈合理的〉に、より正確に言えば〈主観的な判断停止〉を〈合理的〉に遂行している。彼らにとって重要なのは自らが歩むのがどのコースなのかを知ることであって、むろん統計学的な知識ではない。こうした学校の進路指導システムを〈道具化する態度〉は、先にみた専門学校生が示す《アイデンティティに深く根ざす功利的な志向》と同根であるのは多言を要さないだろう。つまりそれらは、たんに道具とみなされつつも、同時に自らのアイデンティティにも深く関与している。その意味でいえば、彼らの示す態度性は極度な分裂を内包している。

こうして彼らは、偏差値という数値を《啓示》の如く受領しつつ、トラッキング・システムを自ら

生きることになる。ここでトラッキング・システムとは、陸上競技の短距離走などを呼ぶ名称に由来する〈進路選別システム〉の意味である。トラッキング・システムには、生徒の進路もトラック競技と同様に複数の選択肢が用意される。だが、そのどれか1つの選択をもって他のコースへの移行を困難にし、かつ暗黙裡に《選択したトラックをゴールまで走り続けることが望ましい》とする含意が成立している。

こうしたトラッキング・システムを生きる彼らは、決して〈自己実現の物語〉を脇に置いたりしない。次の図は、1980年、1992年、2003年の3時点に高校生を対象として「進路選択状況」についてたずねた結果である。この推移には、1990年代のバブル経済崩壊以降の《長引く不況》の影響はみじんも感じられないだろう。たとえば親が地元の大学進学を勧めた場合でも、彼らの志向は志望学部のある東京の大学に向かい、親が就職に少しでも有利とみられる法学部や経済学部を勧めた場合でも、志望学部の文学部に向かう。つまり、彼らの志向は〈自己実現の物語〉を下図として方向づけられていて、その傾向は近年になるほど明らかに中心化している。

進路選択 3時点の変化



(〔浜島, 2004〕より一部修正)

さて、このように考えてみると1990年代以降に顕著とされる《少年たちの従順さ》のなかに「おとなしさ」や何らかの《被抑圧性》を過剰にみる必要はない。彼らは〈合理的〉に学校を道具として活用している。一見すると〈物神崇拜的な態度〉をもって、同時に〈合理的な判断停止〉を伴いながら、彼らはきちんと前を向き、ひたすら用意された制度的なトラックを力走する。むろんそこには、道具性とアイデンティティとのじつにバランスの悪い結合がある。その存立様態はたとえいつ崩れたとしても何の不思議もないだろう。だが、いずれにせよこれが大衆化された〈自己実現の物語〉がもたらす1つの帰結である。トラックの先にあるゴールには、〈実現されるべき自己〉が具体的な職業＝社会的地位と結びついて〈私〉を待っている。現在はその手段＝道具なのだ。彼らの性向は、端的にこう語っている。

そこに問題が生じるとしたら、それはトラックの先にあるゴール自体が何らかの契機によってもはやリアリティを保持し得なくなる場合である。そのとき、当然にも、その直前まで力走していたトラック自体もまたリアリティを喪失する。これもまた大衆化された〈自己実現の物語〉がもたらす、もう

1つの帰結である。それは〈世界総体のリアリティの喪失〉にも通ずるニヒリスティックな事態をも結果する可能性すらある(18)。

あるいはそこに、荻谷剛彦がいう「自己実現アノミー」をみることもできる。たしかに現代社会には、「一方に若者たちから望ましい仕事を奪う経済社会の変化があり、他方に、分け隔てなく自己実現の欲求を若者たちに与えようとする価値観の変化がある。この両者が交差したところに、自己実現アノミーは生じる」[荻谷, 2002: 364]。このように若者たちの現況がアノミー状態であるならば、そこには「宙ぶらりんな「自分探し」をしているつもり若者」[ibid.] も多く存在するにちがいない。だが、「フリーター」も「ニート」も共に「なんでもはいるゴミ箱のような残余カテゴリーの一種」[上野, 2002: 186] であるとすれば、その数値を実体化しその急増如何を問題視するだけでなく、むしろその多様性にこそ、ある種の可能性をみてもよいのではあるまいか。少なくとも、そこで彼らは《現在を現在として生きている》。この存立様態だけは確かにいい得るからである(19)。

おわりに

大衆教育社会以降にあって、人びとが信憑する〈しあわせのかたち〉は〈自己実現の物語〉が担ってきた。だが、そもそもこの〈物語〉は致命的な欠陥を内蔵している。というも、この〈物語〉の成否はすでにつねに《結果》をもってしか判定し得ないからである。

つまり各人の〈自己実現〉が達成されたのか否か、この最終的な判定はそれぞれの《結果》をもってしか語り得ないのである。しかも、その判定基準となる《結果》そのものが《主観性》を過度に前景化させざるを得ない。なぜならば、この〈物語〉においては《結果》がライフ・コースのどの時点の意味するのかを制度的に保障し得ないからである。しかも、そもそもゴールへと至る過程そのものがメリトクラシーや〈自己実現の物語〉が描くほど単純な基準で成立してはいない。そうであれば、判定はますます多様化せざるを得ない。

高度経済成長期には「せめて高校だけは」と目指された〈進学物語〉が信憑され、それゆえ《結果》のタイムスパンは短かった。1980年代には、メリトクラシーの大衆化によって、本流とみなされる大学進学と同時に、他方にメリトクラシーの変種とでもいうべき《実力主義》の表象をもって専門学校への流れが形成された。だが、かえってそのことによって自分自身がはたしてどのトラックを力走するのかの確認がまだ《結果》と近似的に信憑されていた。概略的にいえば、これらの状態を山田昌弘がいう「パイプライン・システム」と呼んでもよいだろう(20)。しかし、1990年代に前景化する〈自己実現の物語〉は個人化のベクトルにおいて生誕している。それゆえ、〈この物語〉を生きる若者にとって《結果》自体の確定が諸個人に回付され、そのために、それは不可避的に多極化せざるを得ないのである。

一方では、制度的な思考がトラッキング・システムを走り抜くことで《未だ現実のものとはならない結果》を担保できると語る。そのゴールはそれぞれに《入学→就職、その先にある結婚》として描かれる従来からのパタン化されたものだろう。だが留意しよう。というのも、そこにみられるアイデンティティと直接につながる性向は、決して制度的な思考の範囲内のものではないからである。もしも制度的な思考が社会的に安定して存立する状態であれば、アイデンティティは即自的に安定しているはずである。だが、むしろ〈自己実現の物語〉はその逆であって、それはアイデンティティを

希求する《近代の若者の物語》の亜種として大衆的に存立している。

このように考えてみると、1990年代後半以降のポスト大衆教育社会を把握するのにもっとも相応しい理論装置とは宗教社会学が培ってきた「世俗化論」ではないかとおもわれる。「世俗化 (secularization)」とは「社会と文化の諸領域が宗教の制度や象徴の支配から離脱する過程である」[渡辺, 1993: 876]。それが現況をもっともよく照射するというのは、ポスト大衆教育社会状況が世俗化論の指摘する《世界や主体の相貌の変容》と軌を一にしているからである。角田幹夫は世俗化の中心を《世界の「意味抜き」》の推進にみる[角田, 1990: 243]。では、この性向が結果するものとは何なのだろうか。

世界が「意味抜き」された以上、個人は均質な世界に1人で……放り出され、ここで世界の意味は個人の側に回付される……。どのような世界観をもつにしても、それは〈私〉が選んだもの……にほかならない……。こうして、世界の〈ゼロ・ポイント〉である〈私〉は世界の脱客観化に怯える存在でもある。[角田, 1990: 246]

原理的にはこのように描写可能な《世界や主体の相貌の変容》は、実相においてはずいぶんと異なっている。というのも、人びとはたんに「均質な世界」に投げ出されているわけではないからである。そこにみえるのは、かなりいりくんだ《等高線》や《飛び地》のイメージだろう。とはいえ、そこには大きな2つの性向が存立する。一方は学校化という制度的な思考のベクトルであり、他方はそれを霧散化させる多様な社会現象として現れる〈脱学校化〉のベクトルである。むろんこれら2つのベクトルは、個人化の性向によって無数のグラデーションに彩られている。というのも、それらは原理的には、それぞれに必ず「私が選んだもの」という刻印を伴って差別化されているのだから。

これら2つのベクトルを、それゆえ無数のグラデーションを下図として支え方向づけているのが〈自己実現の物語〉である。だが、それはそのはじめから欠陥を内蔵している。いい換えれば、それはそもそも〈この世界〉の行く先を明示する地図や羅針盤の機能を持っているとはいえない。こうした世界にあっては、本質的に語れば、逐一〈意味構成〉をし続ける主体が要請されている。だが、そのあまりに大きな負荷に耐えられる主体がどれだけいるというのだろうか。それゆえ、一方では、すでにその耐久性に疑問を持たざるを得ない制度的な思考＝〈進学の世界〉がさらに延命を続け、他方では複雑な過程そのものが括弧に括られて、「運に頼る人間の増大」[山田昌, 2004: 46]を大量に結果する。この〈物語〉が《結果》でしかその成否を判定し得ない以上、それは必然的なプロセスであろう。

現況がこうしたものであるとすれば、はたして何が問われなければならないのだろうか。一方には「『負け組』の絶望感が日本を引き裂く」[山田昌, 2004]と警鐘が鳴らされ、他方には、現況の若者たちの《現在を現在として生きる》性向に新たなパラダイムの台頭の可能性をみいだすより肯定的なまなざしが成立する(21)。そのいずれにより妥当性があるのだろうか。それは私たちが共に引き受け、問わなければならない課題である。だが、こうした問いを保持しつつも、他方で、確実に捉えておかなければならない視点がある。それは現況の示す《多様性》をどのように捉えるかにかかっている。

もしもこの現況が世俗化論が開示した《世界や主体の相貌の変容》と同等の結果を招いているとすれば、それはP. L. バーガーが指摘するように「異端の普遍化」[Berger, 1979=1987: 39]という事態を意味している。そうであれば、現況とは《正統》が不明な時代であり、ここでは《誰もが異端である》。

そうであれば、未だ制度的な思考に囚われながらも、つまり〈現在〉に道具化の視線を注ぎながらも、同時にそこに《現在充實的な視線》を送ること、この〈二重化した視線〉のなかで〈現在を生きるための知恵〉が異端である各人に求められているといわなければならないだろう。それは現況の《多様性》を少なくとも肯定的に生きることを意味している(22)。

●註

- (1) 『中央公論』2005年4月号(中央公論新社)、特集「学力崩壊——若者はなぜ勉強を捨てたのか」。『世界』2005年5月号(岩波書店)、特集「競争させれば学力は上がるのか?」。『論座』2005年5月号(朝日新聞社)、特集「ゆとり教育の失敗」。
- (2) 1990年代後半の情報化への信憑性を考える一例。1999年、アメリカ大統領の「一般教書」ではインターネットは「ウェブ図書館」と目され、翌2000年の九州・沖縄サミットで「IT革命」は議題の1つとなった。同年わが国の「首相所信表明演説」では、すべての国民が情報通信技術を活用できる「日本型IT社会」を実現する「Eジャパン構想」が強調されている。
- (3) ここ数年、高卒者の1割、大卒者では2割程度が進路の定まらない「無業者」とみられ、今や「フリーター」人口は200万人以上、2004年で「ニート(含む「ひきこもり」)」は60数万人を数える。「ニート」対策として2005年から厚生労働省によって「若者自立塾」が開始されているが、「ニート」をたんに就労意欲やコミュニケーション能力の寡少の問題系に収斂させる「若者自立塾」的な把握の仕方は皮相的なだけでなく、むしろこの問題系が持つより本質的な部分を照射していないといわなければならないだろう。なお、「フリーターとは規格にハマらない人たちの総称、なんでもはいるゴミ箱のような残余カテゴリーの一種です」[上野, 2002: 186]とする上野千鶴子の指摘は秀逸である。この指摘はそのまま「ニート」にも妥当するだろう。こうした《残余カテゴリー》を実体視し、それを問題とすることそのものが問題とされなければならないとおもわれる。なお、こうした《職業生活への不適応》を社会問題化する準位には、「職業(occupation)」と世俗化された「天職(vocation)」との関係、いい換えれば〈仕事の信憑〉[井出, 1999a; 1999b; 2004]との関係が捉えられなければならないだろう。
- (4) 山田昌弘は[山田昌, 2005]に先立って[山田昌, 2005]を上梓している。そこでは、「リスク化」と「二極化」という2つの現代社会の性向から「職業」「家族」「教育」や社会心理学的な位相で「希望」が「希望格差社会」として論じられている。本章との関連でいえば、その第7章「教育の不安定化」にも[山田昌, 2005]と同様の指摘がみられるが、後者はそれをより敷衍したもののなので、そちらに準拠して立論する。
- (5) 山田自身は注意深く「情報社会」という用語を使用せず、「ニューエコノミー」と呼称するが、その内容自体を検討すれば、それは通常語られる「情報社会」に当たる。なお、情報社会論の現実可能性の問題も含め、[佐藤, 1996]や[Webster, 1995=2001]また拙稿[張江, 2003; 2004]などの批判的な論及を参照願いたい。
- (6) こうした従来の教育と職業との結びつきの強さ、接続関係を本田由紀は「学校経由の就職」と指摘し、それを「超える」可能性を示唆している[本田, 2005]。
- (7) 山田昌弘は「教育は「手段」なのであって、それ自体が目的ではないことを肝に銘じるべきである。何事も、それをする事自体が目的になってしまうと、一種の「宗教」となってしまうのだ」[山田昌, 2004: 160]と《教育問題》への明快な議論指針を呈示しているが、本章では、あくまでも人びとの信憑性構造という〈意味世界〉に定位した分析が主眼であって、こうした機能的な視点は採らない。さらに附言すれば、たとえ学習過程それ自体が手段として明確に位置づけられている場合であっても、ときとして人は学習過程そのものに〈悦び〉をみい

だしうるのではないか。学習過程がそもそも有している、こうした自己目的性的性向を完全に等閑に附した機能主義的な還元は、錯綜した議論に対して明確な指針としての意義はあるものの、反面、その一面性には十分な留意が不可欠であろう。

- (8) 現代社会にあっては〈成熟すること〉もまた1つの大衆的な問題系である。この点に関しては〔安藤, 1997〕が重要な示唆を与えてくれる。
- (9) かつて教職は《聖職》とみなされ、市井の人びとからも一目置かれていただろう。現在でもそれは《専門職》ではあるが、《サービス職》へと、そのまなざしは変化している。
- (10) 朝日新聞の読者投稿欄の分析をした宮武実知子によれば、1970年代半ばより「受験戦争」という言葉が定着したという。その前までは「受験地獄」が一般的であった。これはたんなる《言葉の変化》を意味しない。大学受験の経験者が少ない頃には「選ばれし者の苦悩」として「地獄」が表象された。だが、多数の参入によって「万人の苦労」という含意をもって「戦争」が中心的な表象となったのである〔宮武2003: 217〕。
- (11) こうした《大衆的な納得》の機制は多様なものであるが、基本的には、《負け組》となったのが、「自分に努力が足りなかった」「運がなかった」などと、個人の責任に転嫁させることで成立する。これは、社会的単位では諸個人に眼前にある結果を受容させつつ、次なる〈戦い〉に再び参入させる動機を持続・維持を意味する。こうして、人びとは目標を分相応に「縮小」したり、別の目標に「代替」したり、あるいは、目標を諦める「冷却」や、諦めずにさらに「加熱」する場合もある〔竹内1995: 76〕。
- (12) ヤングによれば、メリットは「IQ + 努力」と定式化される。IQは測定しにくいものではあるが、努力と業績性の相関は非常に高いとされる〔Young, 1958=1982〕。
- (13) この問題系は逸脱の社会学にあってレイベリング論が担ってきたものである。この点に関しては〔佐野, 2003〕が重要な示唆を与えてくれる。
- (14) 進歩史観の時間構造に関しては、不十分なものではあるが拙稿〔張江, 2002〕を参照していただきたい。
- (15) この点に関しては〔荻谷, 1995〕の他に〔佐藤, 2000〕〔山田昌, 2004〕を参照。また、〔「中央公論」編集部, 2001〕もこのテーマを多角的に捉えるのに有用である。
- (16) たしかに、こうした少年たちの偏差値への態度にフェティシズムをみることはできる。だが、そうした現況に対して《偏差値偏重に悪の主因を塗り込め》、公教育から偏差値を締めだす文部省(1993年)の所業の方が、その何倍も物神崇拜的であるといえるだろう。
- (17) シュッツは日常生活の世界における行為者の〈道具化〉する思考を「レシピ的思考」と名づけ主題的に論及している。〔Schutz, 1962=1983〕所収の「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」を参照していただきたい。
- (18) こうした「ニヒリスティックな事態」をもって〈実存的〉とみることは容易いだろう。しかし、すでに本論で論じているように、現況では、あまりにも制度的にみえる思考それ自体がただちに実存的な相貌を呈している。また、この実存的な事態の深刻さが、「ニート」に象徴化される現代社会の性向を大きな社会問題と大衆的にみなすひとつの所以でもある。むしろ「ニート」の社会問題化には、こうした《剥き出しの実存》とでも呼べる様態とそれへの(負の)シンパシーとでもいうべき忌避感に加えて、より本質的には〈仕事の信憑〉に関わる問題系が作動している。この点に関しては、註(3)を参照していただきたい。
- (19) 教育システムに体现される〈現在の道具化〉に代わる新たなパラダイムが、1990年代後半以降に具象化しはじめているのかもしれない。だが、それは単純に従来のパラダイムを反転させた《現在を現在として生きる》といったものではないだろう。なお、社会学にあっては行為論の伝統がよく示すように、人はたんに現在を生き

るのではない。周知のように、通常の行為において《現在》とは未来に措定される目的を達成するための《手段》と位置づけられる。たとえば「時間がないので急いで行こう」とする時、目的地までの道のりは《手段》である。「空腹なので食事を摂る」という場合も同様だろう。だが、むろん人は〈現在の道具化〉だけで生きているのではない。たしかに、空間移動がたんなる手段の場合もあるだろう。だが、それが手段ではありながらも、そこにある種の快適さを求める場合もあるだろうし、むしろそれ自体が価値的である場合もある。いい換えれば、こうした多様さに彩られているのが私たちの〈生〉である。つまり、〈現在の道具化〉もまた、こうした多様な〈生の態度性〉のうちの1つに他ならないし、そうであるがゆえに、こうした態度性が実際に現実化可能でもある。だが、こうした態度性の絶対化や規範化は逆に〈生の多様さ〉を抑圧することを結果せざるを得ない。教育システムにおける〈現在の目的化〉は一方では妥当でありつつも、同時に、それが規範化され〈生の多様性〉に抑圧的にはたらくのであれば、むろんそうした様態は革新されなければならないだろう。

(20) しかし、1990年代以降にみられるパイプラインの「漏れ」はあくまでも事後的な事態の総称であるに過ぎない点には十分な留意が必要だろう。

(21) [上野, 2002]、特に「7 ポストモダンの生き方探し」を参照。また註(13)を参照願いたい。

(22) ここでいう《多様性》には学校化と脱学校化の二者選択ではない、いわば第3の可能性の模索を含んでいる。たとえば佐野正彦は学校化の飽和状態と呼べる現況に対して次の提言を示している。「どれだけの人が独力で自発的・自律的な〈学びの姿勢〉を獲得できるのか……。[中略] むしろ私たちは、教師という〈制度化された他者〉をはじめとしてさまざまな他者に触発される——それが社会的統制の一変種にすぎないという批判があるにしても——ことによって、ここでいう〈学びの欲望〉なる自発性・自律性も発揮しうるのはあるまいか」[佐野, 1997: 208]。もしそうであれば、私たちは自らがすでにつねに学校化に巻き込まれている存立様態を端的に容認し、そのうえで、それらの改変可能性を模索するのではなければならないだろう。

●文献

- 安藤 究 1997 「成熟の社会的文脈と「大衆長寿」社会」張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『ソシオロジカル・クエスト』白菁社：144-176.
- Berger, P. L. 1979 *The Heretical Imperative*, Anchor Press. = 1987 藺田稔・金井新二訳『異端の時代』新曜社.
- Berger, P. L. & B. Berger
1975 *Sociology*, 2nd. expanded ed., Basic Books. = 安江孝司・鎌田彰仁・樋口祐子訳『バーガー社会学』学習研究社.
- 「中央公論」編集部編
2001 『論争・中流崩壊』中公新書ラクレ1.
- Dreyfus, H. L. 2001 *On the Internet*, Routledge. = 2002 石原孝二訳『インターネットについて』産業図書.
- 張江洋直 2002 「〈奇妙な棲み分け〉の背後へ」社会科学基礎論研究会編『社会科学基礎論研究』1 ハーベスト社：8-25.
- 張江洋直 2003 「情報社会論の存立機制」『稚内北星学園大学紀要』3：7-19.
- 張江洋直 2004 「情報社会の夢と現実」西原和久・宇都宮京子編『クリティークとしての社会学』東信堂：203-228.
- 浜島幸司 2004 「進学意識の現在（20年・10年前と比較して）」深谷昌志監修『高校生は変わったのか（2）』ベネッセ未来教育センター：14-21.

- 本田由紀 2005 『若者と仕事』東京大学出版会.
- 井出裕久 1999 a 「過労死」四方壽雄編『家族の崩壊』ミネルヴァ書房：254-269.
- 井出裕久 1999 b 「過労死と〈仕事〉の信憑」『大正大学研究論叢』7：19-56.
- 井出裕久 2004 「過労死」高原正興・矢島正見・守田洋司・井出裕久編『病める関係性』学文社：121-137.
- Illibh, I. 1971 *The Deschooling Society*, Harper & Row. = 1977 東洋・小澤修三訳『脱学校の社会』東京創元社.
- Illibh, I., et al. 1973 *After Deschooling, What?*, Harper & Row. = 1979 松崎巖訳『脱学校化の可能性』東京創元社.
- 稲垣忠彦 1984 『戦後教育を考える』岩波新書273.
- 岩木秀夫・耳塚寛明編
- 1983 『現代のエスプリ 高校生』195号 至文堂.
- 荻谷剛彦 1995 『大衆教育社会のゆくえ』中公新書1249.
- 荻谷剛彦 2002 『教育改革の幻想』ちくま新書329.
- 荻谷剛彦 2003 「若者よ、丁稚奉公から始めよう」『文藝春秋』2003年5月号：359-365.
- 松本人志 1994 『遺書』朝日新聞社.
- 宮台真司 1997 『透明な存在の不透明な悪意』春秋社.
- 宮台真司・藤井誠二
- 1998 『学校的日常を生きぬけ』教育史料出版会.
- 宮武実知子 2003 「「受験地獄」の黙示録」佐藤卓己編『戦後世論のメディア社会学』柏書房：193-219.
- 丹羽健夫 2004 『予備校が教育を救う』文春新書.
- Reimer, E. 1971 *School is Dead*, Penguin Books. = 1985 松居弘道訳『学校は死んでいる』晶文社.
- 佐野正彦 1997 「権力と学校化社会」張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『ソシオロジカル・クエスト』白菁社：194-209.
- 佐野正彦 2003 『逸脱論と〈常識〉』いなほ書房.
- 佐藤俊樹 1996 『ノイマンの夢・近代の欲望』講談社選書メチエ87.
- 佐藤俊樹 2000 『不平等社会日本』中公新書1537.
- Schutz, A. 1962 *Collected Papers I*, Nijhoff. = 1983 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第1巻』マルジュ社.
- 関口 義 1990 『専修学校全論／1975-2000』地域科学研究会.
- 生涯学習研究会編
- 1990 『私の生涯学習【第一回放送大学卒業生の証言】』第一法規.
- 角田幹夫 1990 「現代社会と聖なるもの」張江洋直ほか共著『リアリティの社会学』八千代出版：239-256.
- 竹内 洋 1995 『日本のメロトクラシー』東京大学出版会.
- 上野千鶴子 1982 「商品－差別化の悪夢」『現代思想』vol. 10-7 青土社：98-111.
- 上野千鶴子 1991 『〈私〉探しゲーム』筑摩書房.
- 上野千鶴子 2002 『サヨナラ、学校化社会』太郎次郎社.
- 渡辺雅子 1993 「世俗化」森岡清美・佐藤勉・本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣：876-877.
- Webster, F. 1995 *Theories of Information Society*, Routledge. = 2001 田畑暁生訳『「情報社会」を読む』青土社.
- 山田雅彦 2006 「学校の役割は終わったか」張江洋直・大谷栄一編『アクチュアリティの社会学』世界思想社〔近

刊].

山田昌弘 2004 『希望格差社会』筑摩書房.

山田昌弘 2005 「希望格差社会とやる気の喪失」『中央公論』2005年4月号 中央公論新社：42-49.

ゾマホン・ルフイン

1999 『ゾマホンのほん』河出書房新社.

●英文タイトル

Mass Educational Society and "Narrative of Self-Realization"

●要約

In this paper, being related to the plausibility structure in everyday life, we deal with a change of schooling and educational system in Japan in the post period of high economic growth. This period coincided with the time of "mass educational society", proposed by T. Kariya on his work, "From where Mass Educational Society Left off" in 1995.

We think that "the mass educational society" is characterized by two indicators, that is, a mass meritocracy and a formal equality; -oriented mass in the schooled society. In general, this period continued from 1974 to 1990, but we should give enough thought that in 1980's, a new mass disposition to "narrative of self-realization" appears to be clear. This new disposition has a definite defect, because a consequence is indispensable as the standard of success. Living with this disposition, however, nobody could know a consequence.

Since 1990's, economic slump has continued in Japan. Under this condition, there is no choice for a part of younger generation but to live in "an anomaly of self-realization", in other words, a secularized situation.

